色彩教材研究会通信　No.338　2023.5.18
発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

訂正掲載・源氏物語の色 -44「匂宮」

この帖は光源氏が亡くなって既に八年が経ったところから始まり、その最期の様子については知ることが出来ない。
実は「匂宮」（におうのみや）と、その前の「幻」との間には「雲隠」（くもがくれ）という巻名のみで本文は現存しない帖が有る。

この「匂宮」から始まる源氏物語の第三部とされる光源氏の没後の物語は、子の薫と孫の匂宮を中心に展開される。

亡き光源氏ほどでは無いが、お二人共に大変優れた容姿の持ち主だと評判であった。

薫はこの世のものとは思えぬ香りを生まれつき身体に持っていて、追い風が吹けば遠く離れた人にも香りが届く様で、庭の花の木もこの人の袖が触れると、もとの香りとは異なる香りを放つ。

一方、匂宮は薫の持つ香りを大変羨ましく思い、競争心から朝に晩に薫香を衣服に焚きしめた。この「匂宮」には色名の表記も無く、また色彩情景を思い浮かぶ様な人物や風景についての具体的な表現も見られない。お二人の容姿についても視覚的描写は無いが、香りの表現から人物像が想像される。（平山和香子）

前号、44 掲載の文章は永田が間違えて「幻」の原稿を掲載しました。深くお詫びいたします。（永田泰弘）

●城一夫名誉会員を偲んで－ 9

城一夫著「色彩の宇宙誌－色彩の文化史－」
明現社発行　定価 2,900 円＋税
初版：1993 年 7 月 15 日

「色彩の宇宙誌」は、白黒の活字でカラー図版は一つもないにも関わらず、不思議と惹かれる本です。本書は、歴史の中で「色」と人間とが、どのようなかかわりをもってきたかを文化史的立場から考えたものとのこと。

第一部「色彩の歴史」では、原始の色彩からエジプト、ギリシャ・ローマ、聖書、陰陽五行説などと色彩との関わりを紹介。

第二部「色の意味と文化」では、色相ごとに言葉の中に深く根を下ろした色彩の象徴性について語られています。

2017 年にノートルダム大聖堂を訪れ、あまりの美しさと荘厳さに圧倒され言葉を失いました。本書の「聖書と色彩」を開くと、《ノートルダム寺院のステンドグラスは、光がそこを通過するだけでなく、光がそこに止まって窓に宝石のような輝きすら与えると伝えられている。》という言葉に、どこまでも美しい光が見えるかのように感じました。

そんな言葉が沢山ちりばめられた、色彩の歴史と文化のエッセンスが詰まった本です。

（竹下友美）

●大辞泉ひろいよみ　17 ーい

色直し：結婚式が終わった後で、または披露宴の途中で、花嫁が式服を脱いで別の色模様のある衣服に着替えること。出産後１０１日目に、赤子も産婦もそれまでの白小袖を色小袖に着替えること。着物の染め直し。
色直しの杯：結婚式の当夜、新夫婦が床に入る前に、改めて杯を取り交わすこと。床杯。
色流し：染料や絵の具を水に落とし、水面に浮いた模様の上に、布や紙を置いて染めつけること。また、染めたもの。
色鍋島：肥前鍋島藩の藩窯、大川内窯で生産された色絵磁器。江戸時代の磁器の中で最も精巧を極め、今日まで継承されている。
色抜き：和服の染め色を抜き去ること。宴会などで芸妓などの女っ気がないこと。色気抜き。
色糊：染料を加えた捺染用の糊。
色話:男女の情事に関する話。色事の話。情話。
色人：美しくなまめかしい人。遊女。色道に通じた人。通人。粋人。
色深し：色が濃い。色が濃く美しい。ひたすら恋う様。情が深い。容色が美しい。
色節：いろふし。晴れがましい行事。また、その折。色調。色彩。
色文：いろぶみ。恋文。懸想文。　（永田泰弘）